

基調講演 「進歩主義の後継ぎはなにか」

添付資料：「進歩主義の後継ぎはなにか」（添付資料1）

梅原 猛 先生

最初にお断りいたしたいのですが、ひと月ぐらい前に、激しい頭痛があり、1週間ほど検査したところ、悪い病気ではなく、若いときに患った蓄膿症が再発しているらしい、と言うんですね。慢性になっているから、なかなか治らない、鈍痛が続いているのです。いままで躁の状態が続いて、学長や所長をしましたから、神様が今度は鬱にして自分の中に集中させて仕事をさせようと、こういう病気を与えたのではないかと、大変いいほうに解釈しております。

この研究会は、廣田先生が、進歩主義の後継ぎという大変いい題を出されました。そこで、青年時代の私の思想をまとめてお話をさせていただきます。ただ身体の調子がそういうことですので、大変勝手ですが、1時間ほどお話しをし質問をお伺いして、失礼させていただきたい。ほんとうは討論に参加したいのですが、鈍痛がひどいものですから、お許してください。

私は、「進歩主義の後継ぎはなにか」という題で、この間から考えたのですが、私が学生時代から55年の間ずっと考えてきた、その思想が、何か解決の方法を与える、そのようなテーマではないかと思えます。それでありますから今日の話は、私の55年の哲学者としての生活感の込められている話になると思えます。

私が学生時代に卒業論文として、「時」という論文を書いたのです。普通、哲学科の学生はだいたい西洋の哲学者の誰か、カントとかプラトンについて論じるのですが、私はそうしたやり方を好まなくて、「時」という現象について論じたのです。その中心は進歩主義批判です。近代の哲学で、進歩という考え方を哲学手法の中心に置けば、その進歩という考え方は成り立たないのではないかと、そういう論文でした。哲学の論文は普通50枚なのですけれど、250枚書いたのですね。第1章だけを主論文にして、副論文で250枚以上書いたのですが、他の哲学者からの引用はほとんどなくて、全部私の思想で書いたのです。

山内得立先生には激賞していただいたのですが、田中美知太郎先生には、「きみの論文は進境？過ぎているな」と言われたのです。それで腹が立ったもので謝恩会の席上で、「私の論文が進境？過ぎるのなら、先生の論文は言い過ぎですか」と言ってしまったものですから、京都大学に残れないことになったのです。進歩という考え方が通用しないということを考えていたのでございます。

進歩という考え方が中心になってくるのは近代哲学で、デカルトやベーコンの哲学です。デカルトの哲学では、コギト・エルゴ・スムというように、考える我というものを世界の中心に置いている。そして、その対象として世界を考える。

それは物質世界、我と精神の世界、その対象となるのが物質世界。その物質の世界を認識するのが自然科学であると。それは目的論的に考えてはいけないもの。非常に機械的な法則性を物質世界は持っている。数によって表現できる法則性を持っている。それを明らかにすることによって、対象世界が明らかになる。明らかになれば、人間が自然を征服できる。自然を奴隷のごとく使用することができる、そういうようなことをデカルトは言っているのです。

これがデカルトの、精神と物質の二元論でございますが、こういう考え方がやはり近代の運命を決めたと思います。こういうふうなかたちでデカルトが言ったような、自然の世界を機械論的な法則で考える。その法則が進めば進むほど自然は明らかになってきて、人間は自然支配が可能になるという、まさに近代文明の本質が明らかになっている。人間の自然支配が可能になるということからデカルトの唱えている進歩という考え方が、必然的に生まれる。そして近代科学が発展してきて、それによって近代ヨーロッパは豊かな国になり、非常に強力な武力を持つようになる。これでヨーロッパ諸国の世界征服が始まってくる。そうすると進歩の考え方は、だんだん近代と同時に盛んになってきた。

特にダーウィンの進化論です。ダーウィンの進化論はいろんな意味を持っているのですが、やはり進化という考え方が発展してくる。闘争によって発展するという、そういう進化という考え方が出てくる。その影響を受けたヘーゲルの哲学は進歩発展という考え方が中心になるわけです。世界史は一つの知性の発展と考えているわけで、壮大な哲学大系をヘーゲルがこしらえた。そういうヘーゲルの考え方を裏返しまして、マルクスが、精神の発展、精神的な弁証法、発展の論理としての弁証法に対して、精神の発展ではなくて、物質的世界の発展という、物質的な弁証、唯物弁証法を立てたわけです。こういう考え方は、特に19世紀には一般的で、アメリカのデューイの哲学も明らかに明るい進歩を考えている。いままで自然は、人間にとって大変な脅威だったけれども、自然科学によって自然は人間に支配される、そういう考え方でございました。日本に戦後入ってきた思想でもっとも顕著なものは、このマルクスの進歩主義とデューイ的な進歩主義、いずれも進歩の概念が中心に置かれています。

私は、そういう進歩という観念が成立しないだろう、そしてマルクスのいうように、貧窮大衆世代の問題が一気に解決するなどというのは、夢物語だといいました。このマルクスの進歩思想には憎悪が根底をなしているということを言いましたら、さあ大変、左翼の陣営から批判されました。私が書いてから1週間ぐらいで早くも悪口をいわれました。えらいものですね。

ところがベルリンの壁が崩壊して、社会主義がソビエトでもだめになった。そのときに私は、マルクスの思想には幾多の優れた点があると書きまして、今度崩

壊するのは資本主義社会だと言うと、「赤旗」に大いに誉められました。梅原というのは本来、反動的だと思ったけれど、こういう反動的な男でさえ資本主義批判を言うと言われられました。私は、進歩という考え方は、やはり崩壊せざるを得ないと固く考えているわけでございます。

たとえば西洋の哲学者の中でも進歩というものの考え方に対して、基本的な懐疑を持った何人かの哲学者がおります。そういう哲学者に私は影響されまして卒論を書いたわけです。たとえばニーチェです。ニーチェはやはりルネサンス以来、西洋の思想は無の中に入っているという、近代世界は途方もないカオスの中に入っていくのではないかと、そういうことをニーチェは言っている。有名なシュペングラーは、『西洋の没落』という本を書きまして、歴史の終末というようなことを言っているわけです。近代では進歩主義はもう成り立たない、ということをやっている。それから、ベルジャーエフという思想家ですが、この人はしきりに近代の終焉という考えを述べています。私が、このような思想に影響されまして、そういう論文を書いたわけでございますが、50数年経ちまして、だんだんそういう自分の哲学者としての出発点で書いた思想が、少しずつ深くなってきたと思います。

この進歩史観というのはどこからきたか。私はキリスト教社会から出てきた、キリスト教の終末論が少し変わった形ででてきたのではないかと。キリスト教には終末論というのが非常に重要です。いまの世の中は、貧しい者が虐げられている世界である。貧しい者、善良なる者が虐げられた世界ですが、やがて神の国、善き者、貧しい者が長、支配者になる、そういう世界が必ずやってくるという。神の国の到来というのは、イエスが言っているわけですが、イエスが生きていうちは神の国は来なかったし、しかもイエスは磔に遭って殺された。そうすると残ったイエスの教団は、非常にショックを受けるわけですが、イエスが生きていうちは神の国は来なかったけど、イエスが天国へ行って、再びやってくる、そのときこそ神の国が来るという。そういうイエスの再臨と神の国の到来ということを信じたわけでございます。神の国が来るのはいつか。イエスの弟子の中で最後まで生きていうペテロが死ぬときが、そうではないかと言われたのですが、ペテロが死んでもやはり来ない。しかし、やがて必ず来るという。そういう信仰がキリスト教の基本になるわけです。イエス誕生以降、100年経って来るという。100年経ってまだ来ない。1000年経って来るのではないかと。1000年のときにエルサレムに、キリスト教徒は、必ず神の国が来るだろうと言って座りこんだのですが、そうしたらイスラム教のアラブ人がやって来て、座りこみをしている人をみんな殺してしまっただけで、この人たちは神の国へ行ったかどうか分かりませんが、そういう大変な悲劇をあげたわけでございます。しかしながら、キリスト教の思想の中には、神の国の到来という信仰がずっと残るのです。もう2000年

経ったときに来るのではないかという、そういう期待は起こるかと思ったけれども、あまり起こらないですね。誰もそういうことを言う人はいない。それはしかし、いつ来るという話はしませんけれど、終末論というのはキリスト教における決定的なものでございます。

しかしながら、そういう終末の到来が、あまり期待できないようになる。そうするとどうなるかという、時間は、この世からあの世へ、地上の国から神の国への一方的な移り行きであると、中世では考えたが、この移り行きが、そして神が信じられなくなってしまふ。そこで、より貧しい、より不幸なこの世から、より豊かで、より幸福な国へ、時間の向きが、「向きを持っている時間ですけど、」？地上の国から神の国へという方向ではなくて、貧しく不幸なこの世から、豊かで幸福な地上の国という、そういう考えになるのです。終末論なのですが、進歩の考え方は、終末論の一種の変形ではないかと、私は思うわけでございます。

このようなキリスト教の考え、この世の国から神の国へという終末が、より悪い、より貧しいこの世から、よりよいこの世へという、進歩主義の考え方に立っているのではないか。これが進歩主義の一つの大きな原因ではないか。

もっと大きな問題は、デカルトの哲学の中心になっているのは、人間が世界の真ん中にいるということです。コギト・エルゴ・スムというのは、人間が世界の真ん中にいるということの宣言だと思います。「われ思う、ゆえにわれあり」、思惟する人間が世界の真ん中にいるという。この人間中心の考え方がやはり、進歩の哲学の根底にある。これは、どう考えたらよいか。哲学はやはりアテネの哲学によって始まる。アテネの哲学には、ソクラテス、プラトン、アリストテレスという、3人の天才的な哲学者によってつくられたわけです。この哲学者の前に、イオニアの哲学とか自然哲学というのがあります。イオニアの自然哲学というのは、「フォーリサブラティカーガー？」などと、ソクラテス以前の哲学者というように、ひとまとめにされまして、その著書はわずかに断片が残っている程度ですが、それが自然哲学だという。ターレスという哲学者は、万物を水と考える。ヘラクレイトスは火と考える。アナクサゴラスは空気と考える。エンペドクレスは地水火風の4原則で考える。それは自然哲学者であると考えたのですが、この時代に小麦農業、牧畜が興って、イオニアの自然が破壊されようとしている。これはちゃんといま花粉分析で明らかにされたようですけど、やはり急速に小アジアの自然が崩壊して行く。こういう時代に、ターレスなりヘラクレイトスなりアナクサゴラスなりエンペドクレスなりは、やはり自然の大切さを説いたのではないか。ターレスは水の大切さを説いた、ヘラクレイトスは火の大切さを説き、アナクサゴラスは空気の大切さを説く。現代という同じような状況があったのではないかと思います。こういう哲学を説いたのです。

ソクラテスも最初は自然哲学者であった。彼は自然のいろいろな実験をしてい

る。これはいろいろ名称がありますが、そういう、ソクラテスも自然哲学に熱中した若い時代を送ったのです。ところがソクラテスは著書を残さなかったので、弟子のプラトンがソクラテスを主人公にして『対話編』というのを書いた。その『対話編』に出てくるソクラテスは自然哲学者ではなくて、詭弁家と言われるソフィストをやっつける。ソフィストは政治的な弁論、すなわちAの立場でも、反Aの立場でも全問に通用するような、Aとでも、反Aとでも言えるような、そういう弁論術を教えていた。そういう弁論術はだめで、真実を明らかにしなくてはならないというのがソクラテスの立場です。ソフィストに対する否定的な立場でソクラテスは姿を現したのです。

私は、ソクラテスはソフィストに非常に影響を受けているのではないかと思います。自然についての思弁を止めて、人間についての思弁へ、自然から人間に考察の対象が移って来るといって、そこからギリシャの哲学は始まるのですが、そういう哲学はプラトンやアリストテレスによって発展させられた。プラトンの哲学はアイデアの哲学という、これは見事に体系的なものです。そういう体系哲学だけで、他の哲学は断片しか残っていませんから、体系は理解できませんが、いま人類に残された最も体系的な哲学が、プラトンやアリストテレスによってつくられている。そのプラトンたちは、ヌースという人間のみが持っている理性を大変重んじている。そしてアイデアという、本質とでも訳しますか、ものの本質というものを認識できるのは、ヌースを持った人間のみができる。そういう意味では、理性優位の考え方がここで確立するのです。ヌースとかアイデアという観念がここで確立するのです。

こういう理性主義は、アリストテレスの思想とはだいぶ違いますが、アリストテレスによって受け継がれます。「アリストテレスは、どちらかという生成をヌースで捉えるという考えですが、」？アリストテレスの哲学に受け継がれるわけです。この理性の哲学、プラトンやアリストテレスの哲学が、中世にキリスト教を基礎付けるものとして用いられたのですが、近代になって、そういうキリスト教教団を離れて、プラトン、アリストテレスが直接人類の哲学に影響を与えたわけです。受け継がれたのは理性の哲学です。

こういう理性の哲学がヘーゲルやデカルトの哲学に大変影響を与えた。ヨーロッパ大陸の合理論というデカルトやライプニッツ、それにイギリスの経験論、ベークンとかロックとかに受け継がれて、ここでも理性が大変重要な役割を果たす。そして最後にドイツ観念論、日本で一番よく読まれ尊敬された哲学者、カント、フィヒテ、ヘーゲルに至る。しかし、理性を強調することは人間を強調することだ。そうすると、どうしても人間中心主義をまぬがれない。マルクスの哲学もやはり、人間がそういう理性を持っているということだし、デューイもマルクスも、人間中心主義をまぬがれないと言っているわけです。

私はこういう思想が大変問題ではないかと。進歩主義の根底には、いま言ったように人間中心主義が介在している、こういう理性の哲学がヨーロッパではソクラテスからヘーゲルまでにはっきり見られる。その人間中心主義の哲学に対して疑問を投げかけた哲学者が2人いるわけです。1人はニーチェです。ニーチェは人間の中心を理性において、理性で万能をとらえるというのは、生きるエネルギーが衰退した人間が理性に頼るのだという哲学を立てまして、ギリシャ思想には、そういう理性の哲学ではない、もう1つの情熱の哲学、生の、意志の思想というのか、そういうディオニュソス的なものがあると、理性の哲学やアポロ的な世界だけでなく、ディオニュソス的な世界が、ギリシャ思想の中心にあるということです。そういう力強い生命の意志の哲学をもう一度現代において復興しなければならない。それはデカルトからヘーゲルまでの哲学に対する強烈な否定。そういう哲学をニーチェは主張したわけでございます。こういうのは、どこかでナチス・ヒットラーの思想と重なる、ヒットラーが言ったゲルマン的思想と。そういうプロダクト的思想は、やはり意志の哲学ですが、ショーペンハウエルとニーチェの影響が非常に強いものだと、私は思います。そういう意志の哲学というものをニーチェが捉えて、ソクラテスからヘーゲルに至る理性の哲学に対して、ノーと言ったわけでございます。

ハイデggerという人も私は好きで、学生時代、ハイデggerの本ばかり読んでいましたけれど、ナチスに彼も関わった。非常にハイデggerの見方についてドイツでは厳しい、彼はナチスの哲学者ですから。いまハイデggerを評価するのはフランスの哲学者だという。彼は確かにナチスに関わった時代がありますが、ナチスの限界というものを見抜いていたと、私は思うのです。戦争中には、しきりに彼はニーチェ論をやるのですが、このニーチェ論はニーチェの批判であると同時にナチスの批判でもあったと、私は思います。そこはどういうふうを考えているかということ、実は意志と理性と言っても、それは裏腹のようなものだと。理性と言っても結局、自然に支配される理性なのだ、それは意志なのだ。だから表の世界は理性だけれど、裏側はやはり意志なのだ。だからプラトンにおいて既に人間を想定するのに自然から想定する。これはやはり、人間が自然を支配しようとする意志なのだと考えまして、ヘーゲルとニーチェは兄弟みたいなものだと。表が理性の哲学で、裏側は意志の哲学だ。そしてその意志の哲学は、自然支配の哲学を克服しなければいけない、私は、ハイデggerは最後にこのような思想に立ったと思います。そして彼は、ソクラテス以前の哲学者に大変共鳴する。ソクラテス以前の哲学者には、そういう意志の哲学はないと。彼は、存在というものに帰って来なくてはならないという。ソクラテス以前の哲学者においては存在が開示されている。ところがソクラテス以後の意志の哲学になると、存在はもう覆われてしまっている。そういう、存在を開示したソクラテス以前の哲学に帰

れというのが、ハイデッガーの主張であります。

しかし、いったい存在を開示したらどういう状況になるか。ハイデッガーは、「デョルブ？」は深い夜があれば必ず夜明けがあると言いますが、一種の神秘主義でありまして、私はそのようなハイデッガーには共感できない。よく哲学者の中で、ハイデッガーと禅と結び付けて、いい気になっている人もいますけれど、それではとても現代の問題は解決できないと思います。

「私は、」「ニーチェやハイデッガーは、」西洋の哲学を全体として見て、それに批判的な立場に立った、西洋の思想全体を、自然支配の意志が支配しているということを「言ったのです。」（誰が言ったのか）私は、非常に鋭い卓見だったと思います。これはやはり、西洋哲学全体を人類の一つの哲学、一つの思想と捉えなくてはならないというように、私は思います。だから、ソクラテスの思想で留まっていられない。やはり西洋の思想を、一つの人類の文化的資産と見る、そういう哲学が必要である。人類の哲学といえ、そういうものがどうしても必要であると思います。

西洋の文明というのを訪ねて行くと、近代西洋の文明を、トインビーにしたがって子供文明とすれば、親の文明はギリシャ・ローマ文明だということになるのです。もう一つの世代は、シュメール、エジプトの文明であるということになりますが、私は文明を、そこまで考えないといけないのではないかと思います。

このような、自然を支配するという意志の哲学を、ずっと遡って行きますと、少し論理が飛躍するかもしれませんが、私は、メソポタミア文明に至ると考えています。メソポタミア文明、最初の都市文明をつくったのはシュメール人ですが、シュメール人は幸いに『ギルガメシュ』という叙事詩を残している。これはホメロスのオデュッセイやエディアスよりずっと古い 5000 年前の叙事詩ですが、楔文へ書かれている断片が残っていて、いまだたいそれが解読されて、内容が分かってきた。私は、その『ギルガメシュ』の叙事詩に感動したのは、ギルガメシュという王様が帝国をつくった。その第 1 にやったことは、森の神フンババの殺戮である。私は、これは大変大事なことだと思うのです。ということは、都市文明をシュメール人はつくったのですが、その都市文明をつくるには森を壊す必要がある。ところが森の中には昔から神様がいた。日本の森にもたくさん神様がいますが。その神様を殺して森林伐採の自由を得る、森林を伐採するタブーを破るという、そういうことだったと思うのです。それからもう一つ『ギルガメシュ』の叙事詩は、人間は不死ではない、人間とは死すべきものだということを、ギルガメシュは悟っている。この問題、この動きがずっと、ギリシャ・ローマ文明には伝えられているということです。人間というのは特別なもので、自然破壊をしてもかまわないという思想と、やはり人間というのは死すべきものだという認識は、ギリシャ文明にも受け継がれていると思いますが、それは非常に大事なことだと

思うのです。

そういうことを考えていくと、彼らの西洋文明の基礎というものを考えなくてはならないのですが、12000年前に小麦農業と牧畜が始まった、これが生産の基礎になる。これがいまのイスラエル地方で始まったということが定説になっていますが、どちらが早いか、いろいろ議論があるのですが、小麦農業が最初にできて、その余剰生産物で家畜を養うようになった。小麦農業が先で、それから1000年ぐらい経って牧畜ができたのではないかというのです。

この農業というものは、急速に自然を破壊して行く。そして都市部分ができますと、それは急速に農地を拡大して行く。そして、水があまりいらない、ですから森をどんどん切って行く。そうして農地を急速に拡大して行く。そのような思想が都市文明をつくったと『ギルガメシュ』、シュメール人の叙事詩の中にはっきり現れているのではないかと思います。これはもの凄い勢いで自然を破壊して行く。だから古代文明の栄えた跡というのは、ほとんど砂漠になっているわけです。かつてはギリシャも、森の国と言われるほど豊かな国でした。ギリシャはメソポタミアから比べると後から発展したところですが、いまのギリシャには森はほとんどない。そしてあそこで発展したクレタ島、島の文明跡も、行ってみれば分かるのですが、ゼウスの生まれたクレタ島全体に全然木がない。徹底的な自然破壊が行われているわけです。そういうところから考え方、思想が出てきているように思います。このような考え方から、ギリシャの哲学も、キリスト教も生まれてきているというように思います。

ところが、このような考え方に対して、東アジアの文明は多少違うのです。東アジアに栄えた農業は稲作農業です。この稲作農業の起源について、つい10年ほど前には、5000年前というふうに言われていたのです。5000年前にだいたい雲南地方で生まれた。そして3000年前に揚子江の下流に来て、2000年前には日本に来たという説があります。これは野生の稲の種類が雲南地方に多いからです。野生の稲がたくさんあるところから農業は生まれたに違いないと。そういう説が15年ほど前までは日本で盛んだったのですが、中国で考古学が大変発達しまして、花粉の炭素の分析で、だいたい年代が確定されました。いまは14000年前に、長江中流・湖南省あたりで農業が発展したと。そして6000年前に長江中流で都市文明ができた。農業の発生も都市文明の発生も、東、西アジアより中国のほうが若干古いということがだいたい明らかになってきたのです。

私どもが日本文化研究センターで、長江文明の稲作文明の起源を探りたいというプロジェクトを始めたのでございますが、稲作文明が非常に古くからできている、そこに素晴らしい都市文明を生んだということは、まず間違いないということになってきたわけです。いままででしたら中国文明は黄河文明に始まった、黄



河文明というのは小麦地帯ですから、それが 3500 年前に始まったということになっていたのですが、どうもそうではなくて、やはり長江文明が中国文明の最初の文明であったと。それはひょっとしたら人類最古の都市文明かも知れないということになってきたようです。私が注目したいのは、稲作農業と牧畜はつながらない、稲作農業文明というのは、ほとんどがお蚕を飼っているのです。小麦文明と牧畜がセットであるように、稲作文明は養蚕とほとんどセットでした。シルクロードは、中国から西アジアの人にとって絹が羨望の的だったということを確認に示しているのです。

農業というのは自然破壊を必ずやるわけですが、自然破壊の度合いが少し違うのです。なぜならば、稲作農業に一番必要なのは水と雨です、雨が決定的なものです。雨は人為でどうすることもできない、人間の力を超えたものであるということ、西アジアの文明ではより深く考えている。それからもう一つ、水を供給するのは川ですが、森林が水を供給して、川にいつも水を流している。そういう性格を稲作農業は持っていますので、自然に対する考え方が少し違っているのではないかと、私は思います。

日本文明をどう考えるかということ、日本文明は土器を持った狩猟採集という文明がはっきりと残っているのです。そういう時代が約 1 万年あって、2000 年前に稲作を受け入れた。しかもその稲作は小麦と比べれば、自然に対してそれほど破壊的ではない。そういう文明を受け入れた。しかも受け入れたのが非常に遅いということで、狩猟採集的な文明が多分に残っていると、私は思います。いまでも日本の 3 分の 2 は、ほとんど山である。その中には天然林という、人工がほとんど加えられていない山がある。これは、そういう狩猟採集文化を多分に残しているからでしょう。

柳田国男によると、森の神、山の神が、田植えと共に田の神になる。田の神は、稲刈りが終わると、また山の神になる。それは稲作文明と狩猟採集文明とが、どこかで連続しているということではないかと思うのですが、そういう性格を多分に持っているのです。

このような問題では、人間中心主義が徹底的に批判されなくてはならない。人間が世界の中心にいて、生きものに対して制裁して奪う権利を持っている。その後の生物は、人間がどんなに征服してもかまわない。征服すればするほど、むしろ人類の幸福というものが保証されるという思想を、私は清算しなくてはならないと思います。

私は、ダーヴィン主義というのは、一つは、進歩・発展という思想を養う一面がありますが、もう一つは、他の動物と人間との連続性を考えた点、大変な功績ではないかと思います。みなさんからお話を聴きたいのですが、生命は一つの根から出ている。そうしてどんどん発展してきたものだとすると、キリストが考え

たように、動物は最初からペアでつくられているが、人間は最初から神に姿を与えられているから、生物を支配できるのだという、人間中心主義的な哲学は崩壊すると思います。そして、人間と動物の共通性という問題が出てくるのです。DNAでも別に大きく変わってはいない。人間とチンパンジーのゲノムは1.23%しか違わないという。そうしたら、ほとんど人間はチンパンジーではないということになります。こういう生物学の新しい認識というものが人間観に採用されていかなくてはならないと、私は思います。

動物の研究によって、動物の世界にも社会があると。「小林さん」？は、動物になんて社会などあるはずがないと言うのですが、今西先生の猿の研究によれば、猿の世界にもきちんとした社会があって、そこにはちゃんと猿社会の構造があるのです。構造というのはメルロ・ポンティ？が言った、未開社会にも構造がある、近代社会にも構造がありますが、それと同じような意味で、未開社会にも構造があるということです。これは生物学の新しい面だと思います。

ひょっとしたら私は、生物の社会にも道徳があるのではないかと、このごろ考えています。この前にテレビを観ていましたら、ジャッカルが獲物を捕るときに、分業をちゃんとやる。ジャッカルの父親は捕ってきた食べ物を、子供や母親にまず食わせて、それから自分が食べるという、そんな話を、この前NHKでやっていました。狩りにはお母さんも出なくてはならない。追い詰めたら、両方から挟み撃ちで捕るのがいいのだから、お母さんも出る。お母さんが出たら、今度はお姉さんが子供の番をしている、ヘルパーになっている。それを見ますと、ジャッカルにもちゃんと道徳があって、いまの日本人の道徳より上なのではないかと。子供を育てる親が、子供を殺す、これはジャッカルより劣ると思いました。動物、人間に共通な性質が、動物学の知識でだんだんはつきりしてくるのです。

これからの哲学は、人間中心主義的な、人間が偉いという考え方を捨てないといけないと思います。ヨーロッパの哲学、ソクラテスの哲学、キリスト教でも、どうも人間が世界の中心である。キリスト教では、人間のみが神の御姿であるという理性を持っている、だから理性を持っている人間は他の動物を支配することができる、そういう人間中心主義的な考え方が西洋思想に強いのですが、これからの人類は基本的に考え直さないといけないのではないかと思うのです。

これに対して東洋の哲学は、そういう人間中心的な思想が非常に少ない。特に一番少ないのは中国の稲作地帯で生まれた道教です。道教というのは無為自然という老子の思想によって自然を尊ぶのです。日本の神道もほとんど同じですが、自然との一体というのを道教は強く説くわけです。

それから仏教も、少しは違いますけれど、人間に関して言うと、他の動物より特別優れているとは考えない。ヨーロッパでもキリスト教でも、人間を殺してはならないという規則はありますが、仏教では衆生を殺してはならない。生きとし

生けるものを殺してはいけない、殺してはいけないものの範囲が、生きとし生けるもの全体になっている。だから仏教というのは、釈迦の教えの中に、道を歩くときは下をよく見て歩けと。これは、虫を殺さないように注意して歩けとという言葉であります。生きとし生けるものも、自分と同じように見るという思想が強いわけであります。

儒教というものを、どう考えたらいいか。中国は珍しく、北半分が小麦農業・牧畜地帯で、南半分がだいたい稲作と養蚕の地帯でありまして、こういう中国の統一思想として儒教というものがつくられたと思うのです。ここには、仏教や道教より強い人間肯定の哲学がありますが、それでも儒教だけは個人の絶対性を説かない、いつも人間を間柄として説く。

濱口先生などは、そういう和辻哲郎の間柄の哲学というものを唱えて、それを社会学的に問題提起しているわけです。私は、間柄の哲学は、儒教だと思います。西田や田辺は仏教の立場に立っていますが、和辻は儒教の立場に立っていると思います。そういう間柄重視ということでは、キリスト教やギリシャ哲学の人間中心主義と違うものにならざるをえないと思います。

稲作農業地帯と小麦農業地帯は、人間観において非常に大きな違いがあって、むしろこれからの人間は稲作地帯の思想が非常に大きな意味を持つてくると思います。

人類の歴史を、農業以前に還るとどうなるかということ、狩猟採集生活、これを人類は何10万年もやってきたのですが、狩猟採集生活の時代にも、文明というもの、哲学というものもあったと思いますが、そのような思想が日本の内地に残っている。それは日本全体が基礎文明として狩猟採集文明を持っていて、そういう思想が残っています。特にアイヌ、沖縄に、そのような思想が強く残っているのです。

ここでは、人間というものを特別なものと考えない。動物も、あの世ではぜんぶ人間と同じような生活をしているという考え方です。この世に動物が現れた場合に、人間のお客さんとしてやって来ている、動物の姿を採っているだけだ、人間も動物も本来変わりはないという考え方のようです。私は、そういう考え方が、これからの人類を考えると、なくてはならないと思うのですが、それと同時に、進歩という考え方が拙いのではないかと思います。アイヌなどの考え方は、これははっきりしていますが、一種の循環の考え方です。

たとえばアイヌは、熊送りというのをやるのです。熊送りというのはイヨマンテと言いますが、「イ」(熊?)を「ヨマンテ」に送る祀りなのです。熊の霊をあの世へ送る祀りである。この世で熊を殺す、そのとき熊は怨むかもしれない。怨むかもしれない熊の霊を、あの世へ無事送り届ける。このようにして熊の霊を大事にして、あの世へ送り届ける。そうすると熊の霊は無事、あの世へ行って、そこ

で向こうの仲間たちに、人間に非常によくもてなされて送り返されてきたと言うのです。そうすると、熊たちがそれを聞いて、そうしたら俺も私も行こうかと、また来年、熊がこの世へ帰ってきて、たくさん熊が捕れる。熊ばかりか、すべての生きとし生けるものは、この世とあの世の間を無限の往復をしているという、一種の無限循環です。

縄文時代の産物として貝塚というのがありますが、アイヌの世界の人たちは今でも貝塚をつくっています。貝塚というものの考え方は、貝の霊をあの世に送るのです。貝をあの世へ丁重に送れば、貝の霊はあの世へ行って、そして仲間の貝に、人間に大変立派にもてはやされてきたと。貝がそういうふうになると、そうするとまた来年、貝がどっさり獲れる。

人間も同じように、あの世とこの世に。死んだらあの世へ必ず行く。あの世には一足先に行ったお父さんやお母さんが待っている。あの世でもやはり、この世と同じように家族生活をして、そしてこの世で子孫ができると、あの世へ通知が行って、あの世の誰かの霊が帰ってきて、そして妊婦の胎内へ入って生まれてくる。生まれた人間は必ず、あの世へひとまず帰った昔の祖先が帰ってきたんだ、そういう信仰が縄文時代以来、ずっと日本人の信仰であった。そこに少し仏教が関わり、多少の影響をしますが、ずっと信仰であったような気がします。江戸時代まで、だいたいそういう信仰の中で人間は生きていたと思います。

この考え方は、永遠に帰ってくるという、一種の永劫回帰の思想であります。永劫回帰の思想と言え、私はニーチェの思想を思い出します。多少ニーチェの思想とは違いますが、永劫の回帰、あるいは永劫の循環という観念があるのです。日本の思想の根底をなすのは、そういう回帰・循環時間ではないか。

俳句が出てきたというのは日本の大きな特徴ですが、俳句は季節が必ずある。だから1年が一つの大きな循環世界であり、また次の1年があると。そういう循環型の時間、この循環型の時間が、少し付け加えれば進歩・発展もありますから、線形に展開されるといった時間の捉え方が、新しい、進歩支配の世界の次に来る時間観ではないかと思えます。

その意味におきまして、21世紀の哲学は、共生と循環の上に立たなくてはならないと思います。それは思想的には、もう一度人類を狩猟採集時代に戻して、その狩猟採集時代の思想を新しい人類の思想にしなくてはならないのではないかと思います。

ただし、人類が発明した新しい科学技術は大変な要素です。もし縄文時代に戻ったら日本で住めるのは20万人だと言いますが、1億以上の人ここに住むためには、科学技術はどうしてもいります。しかし、その科学技術は自然の支配というようなことではなくして、人間が他の生物と共存できるため、そしてその共存の世界がいつまでも続いて行くという、そういう科学技術に変わらなければなら

ないのではないかと、私は思います。これは福井先生がしきりに晩年に言っておられましたけれど、福井先生の予言は正しいのではないかと思います。

大変大雑把な話でございますが、一応、僕はこれだけにさせていただいて、いろいろご意見をお伺いしたいと思います。

(基調講演：終了)

○廣田 ありがとうございます。

梅原先生はご都合で早くお帰りになられますので、休憩時間の前にご質問をいただきたいと思います。

○佐藤 一度お聴きしたいと思ったのですが。終わりのほうでちょっと出てきました和辻、西田ですね。和辻哲郎の『風土』というのを最近、電車の中で読んでみましたが、何を言っているのか分からない、何を主張したいのか分からない、けれど、読んでいて、凄く面白いんですね。ああいう農業の形態みたいな文化と関係付けて。勝手な関係付けか知りませんが、なかなか読ませるものはあったのです。

和辻という人を、僕は物理屋だからよくは知りませんが、彼の有名な本しか読んだことがないのですが、あの当時の日本の哲学者を、どういうふうにして読めばいいんですか。たとえば西田の何かを、私も最近引用したことはあるのだけでも、全体を知らないものだから。西田は、「夜の見方、昼の見方」という言い方をしていますね。自然科学は一種の「夜の見方」だと。僕はその通りだと、自分勝手に解釈しましたが。梅原先生から見られて、哲学者に対する特段の評価というようなものをお聞かせいただけませんか。

○梅原 私は、そういう哲学者の中で、独創的で世界に通用する思想を持っていたのは、やはり西田と和辻の2人だと思っています。西田は、実在とはこういうのだと深く心の中で考えて、非常に難しい概念に到達しました。和辻は、ものを見ながら仮説を立てるのですよ。私は、若いときから西田を尊敬してはいたが、あんなに難しいものはないね。和辻のほうは、ものを見ながら思想を立てる。そちらのほうが、どちらかと言うと、私は大きな影響を受けたのですね。

和辻には、二つの業績がある。一つは風土ですね。それから倫理学です。倫理学は濱口先生の取り組んでおられる人間の間柄の倫理学なのです。これも非常に大事な概念だと思うのです。風土を言えば、風土によって違うのですよね。こちらはモンスーン地帯だと。それからインドは砂漠地帯だと。それからヨーロッパのほうは牧場地帯だと。風土と文化と、どのように関係するかと。こちら側の東アジアの文化は、モンスーン地帯で説明しているのです。いろいろな説明ができますけど、農業では生産が欠けているんです。

和辻は、こちらがモンスーン地帯で、砂漠や牧場との対比・比較で評価するん

です。同じモンスーン地帯だって、気候で比較しないといけませんでしょう。こちらは気候で、こちらは風土でしょう。こちらの方は生産ですから、こうなると比較が成り立たない。そこが拙いのです。

もう一つ拙いのは、やはり農業の中の違いを考えていない。モンスーン地帯は稲作農業、それからヨーロッパ的風土の地帯は小麦農業です。このような農業による比較がない。農業で比較して、その上に文化というのがあるという点が欠けているんですよ。だから和辻に対しては、私は、そういう風土の比較論をしたことは大切ですけれども、やはり農業の違いを分析していないのは、大きな間違いだと、和辻をそういうふうに批判している。私が和辻を批判的に継承しているのではないかと思っています。

もう一つは、人間は人間との関係で考えないといけません。人間と自然の関係とか、人間と人間の関係という、関係概念が、おそらく今度の新しい人間観の根底だと。これは濱口先生が専門です。だから和辻は、その二つで大変な功績があったと思うのです。

西田の場合は、世界はこうだという、世界を弁証法的な運の世界だとか、一般的限定すなわち個別的、個別的すなわち絶対矛盾の自己統一であるのであるという、念仏を唱えているようなもので、ちょっと批判がしようがないんですけどね。だけど西田の功績は、デカルトの二元論の批判で、自我と人間と自然とは一体になった世界がほんとうなんだという点です。たとえばピアノと二重になったときは、自分なんてない、人間とピアノが一体になっている、そこが根底的であり、そこから考えて行くという。デカルトが初めから二つを考えているのは間違いだと。デカルトの二元論に対する厳しい批判は他には少ないんですよ。

僕は、そういう意味で西田哲学に憧れて京大に来たんですけどね。だけど京大に来たら西田のお弟子さんたちが、みんな西田と同じことばかり言っているのだ。上から下まで絶対矛盾の自己統一とか、絶対矛盾の同一とか、人間は矛盾の同一だとかと言う。なんで矛盾の同一だと言ったら、経験と勘とにおいても、経験と人生は違うけど、それが同一だから、絶対自己矛盾統一だと言う。それなら男と女は違うけど、合一したら絶対矛盾の自己統一かと言ったら、もの凄く怒られましたね。西田を冒瀆するのと言って。もう1回生の時から注意人物になりましたよ。成績は大変よかったんだが、京大から追い払われたんです。しかし私は西田が、仏教も取り入れ、西洋哲学と一緒に、新しい体系をつくらうとするのには、私は賛成ですね。けどもっとやさしい言葉で言うべきだったと思います。

それからやはり、外の世界からのインパクトがないのですよ。これは大変な欠陥です。和辻のほうが、外の世界をいつも見ながら理論を立てているのです。私はどちらかと言うと、思弁の深さにおいて西田のほうが上だと思いますけど、和辻のほうが僕らには理解できる。それだけ批判もしたいのだけど。そういうふうに

思いますね。

京大では、西田についての議論を失礼だ言うんだよな。西田が言ったことを、応用すればいいと言ったら、とんでもないと言うので、僕は喧嘩をし、追放されましたけど。京都大学で僕らが学んでいた哲学は、そういう西田哲学を絶対とするか、あるいは西洋の哲学を一生やっていたらいいという考え方だよな。哲学が、生き活きとした現代の問題に、ほとんど答えることができなかった。僕はそういう現代の問題を若いころから考えていたのです。けれども、自分では壮大なことを考えているつもりでしたが、他の連中には、さっぱり何かわけが分からないと言われました。

本日こういうかたちでテーマが出されてきたので、いままで西洋の哲学の流れを書いていないので、これから体系をつくりたいと思いますね。やはり哲学は体系がいるのですよ、首尾一貫した体系がいるのです。体系と、それから人生に対する直感と、この両方がいりますね。

これを両方備えているのは、やはり西田と和辻かな。田辺さんはもじってつくったようなところがあってね、哲学をね。「上に」？こしらえられたという、いかにも無理をしている。僕は田辺さんと会って、これはもの凄く大きな空振りみたいなものですよと言ったら、これまたやられましてね。空振りとは何事だと言って。文章は悪文で、こんなものでは全然だめですよと言ったら、怒られまして、1回生から注意人物になりました。

今日は、いままで私があまり書かなかった西洋哲学との関係をお話ししました。この西洋哲学のことはどうですかね。勉強したいと思いますがね、どんなことを勉強したらいいですかね。

○濱口 今日お話ししようと思ったことを、先に先生が全部言われました。

○梅原 やはりね、近代の科学の発展の一つは、生物学だと思いますよ。生物が一つの「根葉」？から出てきたのは非常に大事ではないかと思います。こういう認識なしに人間を議論することはできないですよ。だから道德の根源も、僕は動物にあると見たほうがいいと思いますよ。社会と道德は動物から。人間は欲望が多過ぎるんですよ。動物は自然に道德がありますけど、人間は人為的な道德が必要じゃないかという。セックスでもだいたい動物は生産のためでしょう。人間はしょっちゅうセックスを考えている。こんな変な動物はないですよ。

私はいま、『我輩はムツゴロウである』という小説を書こうとしています。なかなか完成できませんね。今年は1年びっしり集中して、何とかその『ムツゴロウ』を完成したいんですけど。この小説では、人間をもう1回、動物の目から見てみる。そうすると、人間というのはひどい動物だということが分かると思うのです。

そういう認識の上に立たないと、共存と言ったって無理じゃないかと思うのです。そういうことで生物学を勉強していますけど、なかなか。

○高畑？ 非常に初歩的な質問で恐縮ですが、『ギルガメシュ』のところで、フンババの殺戮というのは進歩主義を現すような象徴的な行為だったと思うのですが、もう一つここで、人間は死すべきものであるということをおっしゃったのですが、それはその後の文明の発展に、どういう意味合いを持っていることをおっしゃったんでしょうか。

○梅原 それは、ギリシャ哲学の基本的な「トレントス」？です。神様は永遠だけど、人間は死すべきものだという、ギリシャ思想の中心になっているんですよ。

ところが、エジプトのほうは、どうもそうじゃないね。やはり人間は永遠的なものという考えの方が強いと思います。どうもメソポタミアのほうに、そういうような認識があったと思うんです。それをずっとギリシャは受け継いでいるんですよ。ときどきエジプトのほうの思想が入ってくるんです。プラトンの中にもエジプト観念の思想が随分入っているんですよ。

キリスト教はむしろ永遠のほうですよ。だから人間を永遠と見る考え方と、それから死すべきものだという、二つの見方があって、ギリシャはどちらかというのと死すべきもの。キリスト教のほうが、エジプトの文明を強く受けているんじゃないかと思われませんか。

だから、これは『ギルガメシュ』という芝居を書いたんですけどね、私の演劇の中で書いたのは全部、『ヤマトタケル』でも『オグ』でも、みんな芝居になって大当たりしたんですけどね。これは日本でまだやらないんですよ。これをやっても猿之助が成功する見込みはないと思って、やらないんです。中国でやりましたね、中国で大変評判がよかったんですよ。だから日本はまだ認識が弱いので、やられていないんですけどね。だけどこれは私の作品では、一番いいものだと思うんです、文学作品では。

それからもう一つ、どうしても『我輩はムツゴロウである』というのを。やはり漱石の『吾輩は猫である』を受け継いでいるんですけどね。猫は人間のペットでしょう。だから人間に対して見方が甘いので、人間批判というのはできないんですよ。ムツゴロウは人間から遠いしね、これはもう皆殺しに遭っているからね、情念を持っているわけですよ。それをどうしても書きたいですね。

もう70歳になりましたからね、あまり時間がないんだよ。だから今からちょっと頑張って、まだ20年ぐらいやらんとね、書けないような気がするけどね。人類の哲学とか、そういうような『ムツゴロウ』を書きたいんですけどね。

20年間、健全に頭を持って生きられるかという、それが心配なんですけどね。だからきっと、ちょっと頭痛を与えてね、神様は、あまり社会的に活動をするなということだなど。毎日この仕事にかかれということだと思って、勝手に解釈し



て、何とか小説『ムツゴロウ』を書いて、人間中心主義の批判をしたいと思っています。それからもう一つは人類の哲学をどうしても書かないとならないと思ってね。

濱口先生どうですかね。濱口先生は、間柄というのを、やはり社会学で展開している。これは大変いい仕事だと思いますけどね。

それではこれで。

○廣田 ありがとうございます。

(休憩)